



Title	広域的に分布する外来哺乳類における外来種管理研究：アライグマ管理の担当者における課題と管理の進展に向けて [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	鈴木, 嵩彬
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12964号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/70344
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Takaaki_Suzuki_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 鈴木 嵩 彬

主査 教授 池田 透

審査委員 副査 教授 宮内 泰介

副査 教授 佐々木 亨

学位論文題名

広域的に分布する外来哺乳類における外来種管理研究：

アライグマ管理の担当者における課題と管理の進展に向けて

・当該研究領域における本論文の研究成果

保全生態学研究、特に外来種対策研究における本論文の成果としては、以下の4点が挙げられる

第1に、外来種研究に関する歴史が浅い日本において、外来種管理の理論的背景となる侵入生物学 (Invasion Biology) を踏まえて、アライグマの防除対策を捉えなおした点である。従来の日本の外来種対策、特にアライグマのような広範囲に定着した外来種対策では、短期的被害（特に農業被害）の低減ばかりが意識され、対象種の侵入段階に合わせた対策構築という基本的姿勢が欠如した、被害対策中心の対症療法的捕獲事業に終始してきたが、本論文では、まず海外の外来種研究及び日本の外来種対策をレビューすることからアライグマ問題の位置付けを明確にし、アライグマ管理において、局地的な農業被害対策ではなく、外来種管理という論理の中で、どのような調査・研究が必要なのかを明示している。

第2に、日本の外来種研究は、対象種の生態を中心に分布や拡散傾向、繁殖生理に基づく管理手法の開発に力が注がれてきたが、一方で外来種対策における Human dimension 研究は極めて少なく、本研究は広域的に侵入した外来種管理に関する Human dimension 研究としては日本では先駆的研究となっている。特に日本の外来種対策の事業主体となっている自治体の対策に関する総合的研究としては日本初の分析であり、かつ丁寧な手法によって日本のアライグマ対策の現状と課題を整理している。

第3としては、外来種対策に関する研究は、国際的にも根絶 (eradication) の成功事例に関する研究が多く、管理 (control) のプロセスを詳細に扱った研究は少ない中で、本研究は上述のように日本のアライグマ対策の現状と課題を明らかにした貴重な管理プロセスの研究事例となっており、国際的にも注目度の高い研究となっている。

第4に、本論文において外来種アライグマ管理に関する全国規模での課題の整理・分析が行われたことによって、今後の日本のアライグマ対策の発展に多大な社会的貢献が見込まれる。従来は地域的対策に関する研究が散見していただけであり、各自治体においては効果的・効率的防除対策の立案に苦慮してきたが、本論文の成果をもとに今後の日本のアライグ

マ防除対策における進展が期待される。特に、本論文では先進的対策事例に関する詳細な取り組み内容を分析することから対策課題の解消に向けた方向性を提示しており、他地域への応用によって全国的な課題の解消につなぐことのできる社会的ニーズに答える研究としても価値を有する論文と評価できる。

・学位授与に関する委員会の所見

審査委員会は、上述の点において本論文の達した成果を評価し、本論文が博士学位論文の水準に達していることを認める。従来の外来種研究は、生態学を基盤とした理論的研究と実践的防除対策研究に大きく二分される傾向にあったが、本論文は侵入生物学の理論体系を基礎とした実践的防除の分析及び課題の整理という新しい試みに成功している。また、学問的貢献に加えて、全国の自治体の要望である効果的・効率的アライグマ管理の実現に向けて、社会的貢献度も高い論文となっている。

しかし、その一方で審査委員会では、本論文の問題点も指摘された。現状のアライグマ対策の課題解消に向けた最終的な提案内容がややオーソドックスな提言にとどまっており、分析内容や申請者の研究・防除実践経歴から判断すると、さらに些細で画期的な提言が可能と思われた。この問題に関しては、口頭試問での回答から、多様な要因が混在して進展が困難となっているアライグマ防除対策の現状を鑑み、まずは堅実に方向性の転換を図ることが重要であり、大胆な提言を意図的に避けたという説明があり、学位申請者の今後の研究における課題として取り組み、改善されうるものと捉えている。また、分析の対象とした自治体の選択理由の記述がわかりにくい点、図表のタイトルや分野特有な用語の用法など、文章表現上の問題がいくつか見られたが、これらの問題点は本論文の価値を大きく損なうものではないと判断した。

学位申請者は、本学理学部の出身であり、すでに基礎的な自然科学的素養を有しており、本研究科で人文・社会科学的研究をまとめたことによって、今後は緊急を要する社会的環境問題に対して幅広く学際的に取り組み、新たな境地を開いてくれることを期待するものである。

以上の審査結果に基づき、本審査会は全員一致で鈴木嵩彬氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。